

奮闘少女と自治区の闇

空なき世界 〈アルミナ〉

九条菜月

Natsuki Kujo

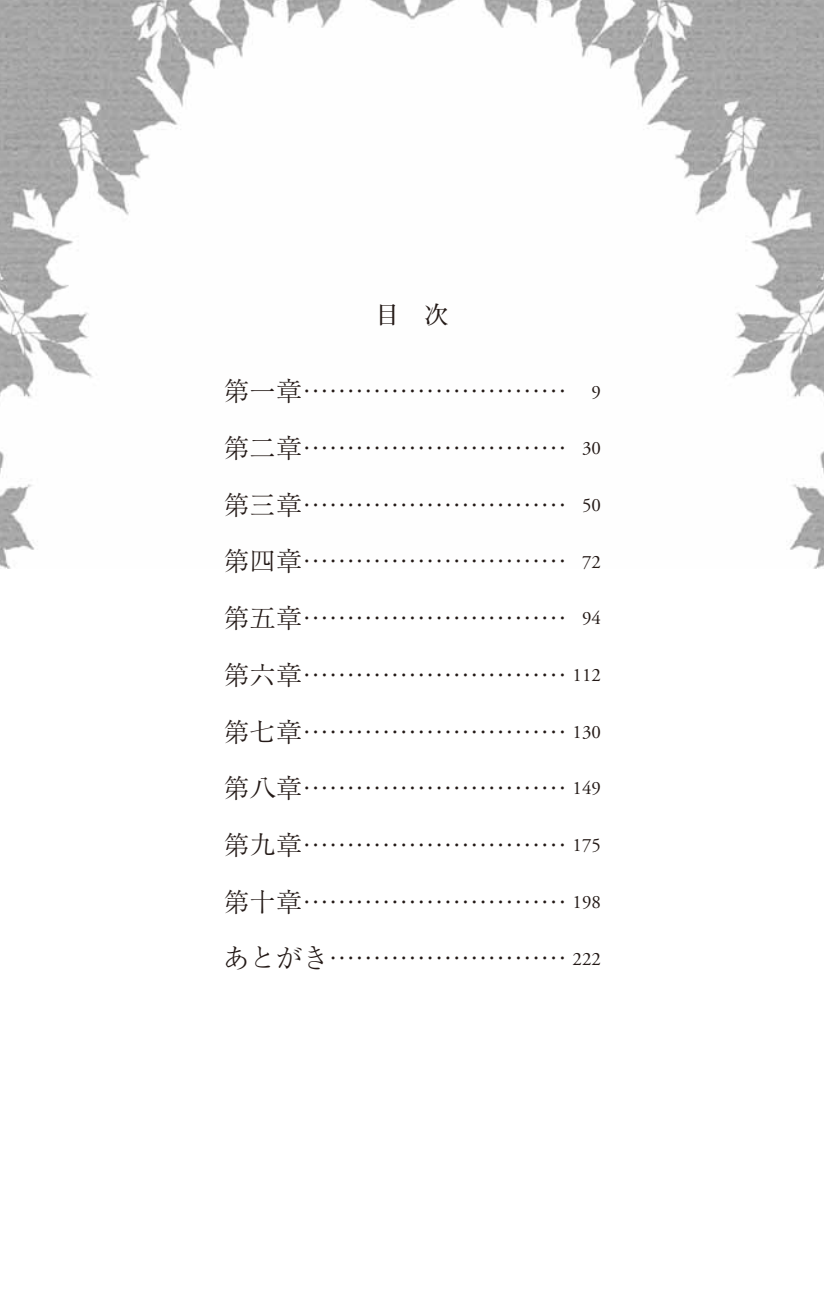
立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

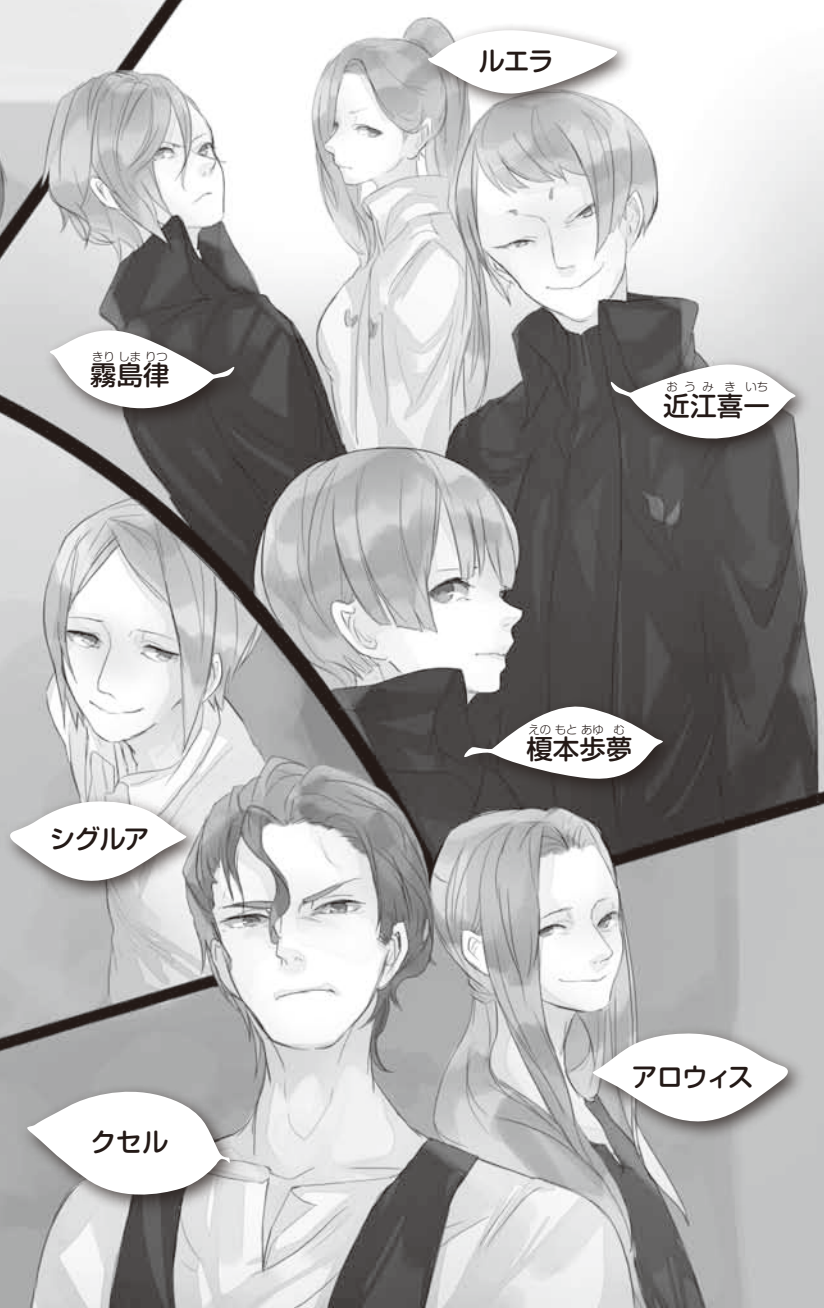
- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 水溜鳥

A decorative border of stylized leaves and branches frames the top and sides of the page. The leaves are dark green with lighter green veins, and the branches are thin and dark.

目 次

第一章.....	9
第二章.....	30
第三章.....	50
第四章.....	72
第五章.....	94
第六章.....	112
第七章.....	130
第八章.....	149
第九章.....	175
第十章.....	198
あとがき.....	222



ルエラ

霧島律
きりしま りつ

近江喜一
おうみ きいち

榎本歩夢
えのもと あゆ む

シグルア

クセル

アロウイス

キャラクター紹介

ミー子

リエフ

なる せ ま こと
鳴瀬真琴

ヨグリゼ

奮闘少女と自治区の闇

空なき世界〈アルミナ〉

第一章



泥塗れの手を払う。乾燥した土がぱらぱらと剥がれ、力を込め過ぎて真っ赤になった地肌が覗いた。

「あー、腰が痛い」

立ったまま上半身を反らし、軽く腰を回す。バキ、ボキ、と盛大に節が鳴った。ずっと屈み続けることが、こんなにも苦痛だとは知らなかった。

収穫した口口芋を持ち上げた鳴瀬真琴は、重さで手が滑らないように気を付けながら荷車に乗せた。見た目はカボチャそっくりの口口芋は、小さなものでも大きさはカボチャの二倍近い。一つ持ち上げるだけでもかなりの重労働だ。

荷駄に寄り掛かりながら、腕で額に滲んだ汗を拭く。真琴の服装は、太股まで隠れる麻のような生地で仕立てられた半袖のシャツと黒のレギンスである。シャツは腰の部分をベルト代わりの布で縛り、裾はお尻が隠れる程度に調節している。靴はなく、常に裸足だ。

癖の強い黒髪は肩に掛かるくらいで、そろそろ結うか切るかしないと邪魔な長さになりつつある。前髪も、密かに自慢に思っているくらいとした大きな瞳に入るようになっていて、今のよう汗をかいた時などは額に張りつき酷く不愉快だ。

「はあ……。ようやく半分が終わったところかな」

眼前には、辛うじて畑と呼べる光景が広がっている。そこで十人ほどが、せっせと口口芋を掘り出していた。耕してもなお、硬い地中に半分ほど埋まった状態で育つため、収穫は一日掛かりの大仕事である。

ふう、と溜息をついて、真琴は天を見上げた。
 この世界には空がない。

光は遮られ、日中にもかかわらず地上は夕方のような仄暗さに包まれる。それはアルミナの木が天上を覆っているからだ。

——異世界、なんだよねえ……。

人から聞かされた話なら俄には信じられないが、身をもつて体験しているのだから認めるしかない。地球という星の、日本という国で育った真琴が、なぜアルミナで暮らしているのか。

すべてのはじまりは、真琴が住んでいた青葉荘に、実の兄と名乗る初対面の人物——鳴瀬要人が現れたことだった。そんな青天の霹靂とも思える出来事よりも真琴に衝撃を与えたのは、青葉荘の住人たちが要人の存在を知っていたことだった。

自分だけがなにも知らされていなかったという状況に苛立つ中、真琴は青葉荘の住人、近江喜一と要人の会話を盗み聞きし、父、鳴瀬灰の失踪を知った。

アルミナに落ちたのは、それからすぐのことだ。その時のことは、できればあまり思い出したくない。鍵を掛けて、記憶の奥底にしまっけてしまいたいくらいである。

青葉荘の住人や要人に助けられ、その時は無事に地球に戻ることができた。本来ならば、真琴は失踪したままの灰を心配しながらも、代わり映えのしない日常を送る——はずだった。

だが、真琴の前に突然現れたのは、エミリア・レイフルという二十歳くらいの女性だった。謂われのない暴力を受けた真琴は、二度と戻ることはないと思っていたアルミナに再び落とされた。

森をさ迷い、ようやく辿り着いた街——第三自治区では、ガラスの悪い男たちに追い掛けられ、街中を逃げ回る羽目になる。もう駄目かと絶望しかけた時、助けてくれたのは、三区に偵察に来ていたリエフだった。

アルミナ語の読み書きができる真琴に、リエフは

取引を持ち掛けてきた。

そして、連れて来られたのが、ここ第五自治区であつた。真琴の仕事は、税の納付の際に役人に提出する納税書の作成をはじめとする事務処理だ。書記官と呼ばれる役職で、今までそれらの業務を一手に担っていた人物が病のために亡くなつてしまつたため、後継者を捜していたのだそう。

アルミナの暦では一年は三百五十日あつて、それが十の月に分けられる。税の取り立ては年に二度。一の月の末と、六の月の末だ。役人に納税書の作成を依頼することもできるが、横領目的で書類を改竄する者が少なくないらしい。アルミナ語の読み書きができる人材は、のどから手が出るほど欲しかつたようだ。

その他にも、手が空いた時は農地に家畜小屋にと、人手が必要な場所に問答無用で連行される。その大半が、今回の口口芋掘りのような肉体労働である。

第五自治区で暮らしはじめ、はや三週間。体から

は余計な脂肪が落ち、心なしか筋肉もついたように思う。色々なことに目を瞑れば、健康的な生活と言えなくもない。

「おい、サボってんじゃねえぞ」

背後から後頭部を小突かれ、真琴は思わず畑にっんのめりそうになつた。口よりも先に手が出る人物といへば、心当たりは一つしかない。

「ちよつと休憩してただけでしょ！」

頭を押さへながら振り向くと、不機嫌そうな表情を浮かべたりエフが立っていた。茶色の髪はショートカットで、服装は着古されたシャツとズボンという格好である。髪と同じ茶色の瞳は切れ長で、気の強そうな印象を与える。

身長は百五十二センチの真琴よりもやや低めで、年齢は十三と聞いているが、大人びた雰囲気からもう少し上に見える。どこからどう見ても目つきの悪い少年にしか見えないが、リエフは女の子だ。真琴がそれを知つたのは、ごく最近のことである。

「それよりも、リフは口口芋を運んだりしてないでしょうね？」

じつと見つめると、わずかに視線が逸そらされた。

「……口口芋の積み方が気になったただけだ」

「だからって、手を出さない！」

視線をリエフの足下に向ければ、積み直すために荷車から降ろしたと思われる口口芋が置かれていた。

「なにもしないっていう約束だったよね」

「こんなの、動いたうちに入らない」

「屁理屈へりくつを捏こねない！」

リエフはちょうど一週間前、寄生軟体獣グリィズという巨大なナメクジのような化け物に襲われ、右足に大怪我おおけを負った。皮膚ひふを溶かされたが、骨折しているわけではないため、痛みさえ我慢すれば歩くことは可能らしい。はじめは熱で苦しんでいたリエフだったが、体調が元に戻ると、周りの人々の心配を余所よそに勝手に出歩くようになってしまった。

これにはリエフの母親で、第五自治区の代表者で

あるナディアも頭を抱え、半ば寢床に括くりつけるように押し込んだのだが、それでもリエフは懲こりずに脱走を繰り返す始末。その結果、肉体労働はさせられないが、歩き回る程度なら問題ないだろうと、周りの人々が折れることになった。

しかし、じつとしてるのが苦手なりエフが、黙って見ているはずがない。そこで監視員に抜擢ばつてきされたのが真琴である。

少しでも重いものを持つとしたら、容赦ようしやなく吐すつてくれていいから、と彼女の母親からはお墨付すみづきを得ている。

「お前だって、まだ怪我が治ってないくせに」

「私は軽傷けいしやうだもん」

当初はリエフと枕を並べて療養していたが、もともとと傷の程度は軽く、熱やけどさえ下がってしまえば回復は早かった。火傷の痕や青あざはまだ残っているが、口口芋を掘り起こしたり、運んだりするくらいは平気だ。未だいまに包帯が取れないリエフと比べる方がお

かしい。

「次、なんかしたら、ナディアさんに報告するからね」

「……草むしりくらいはいいだろ」

「むしるほどの草はないけどね。家で休んでた方がよかつたんじゃないの？」

きつと、五区の人々に迷惑を掛けたことを気にしているんだろ。真琴は心中で、やれやれと溜息をついた。

第三自治区の者たちによる襲撃があつたのは、今から八日前のことだ。目的は税物である。

この世界には自治区の他に、ニールフェルナとノウバンドという国がある。自治区はその名の通り、住人たちによる自治が認められているが、両国どちらかの庇護下ひごかにおいてのものだ。

それぞれ定められた国への納税が義務づけられている。第五自治区の納税先はニールフェルナ国である。税が納められなければ、その自治区の寄生軟体

獣の駆除が停止されてしまう。

寄生軟体獣を退治できれば、税の半分が免除されるという約束事に着目したリエフは、危険を顧みずに単独で森に入った。わずかな可能性に希望を託したのだ。

しかし、その結果、リエフは大怪我を負った。救出が少しでも遅れたら命はなかっただろう。寄生軟体獣は運良く真琴の機転で退治でき、その遺体を提出することで税も半分が免除される見通しだが、一歩間違えれば街は大惨事に陥りかねなかった。

おそらく、本人もそれを痛いほど自覚しているため、大人しく寝てなどいられないのだ。

「体が鈍るなま」

「はあ……。怪我人なんだから、言い訳しないで大人しくしてなさい」

命令口調で告げた真琴は、リエフの足下にあつた口口芋をさつさと荷車に積み直した。それでも積み方に不満そうな顔をするが、さすがになにも言わな

かった。

——ここまで言えば、むりはしないはず。

少し強く言い過ぎたかなと思わないでもないが、これくらい強気にならなければリエフは無茶をするに決まっている。大人しくしていた方が怪我の治りも早いのに、頭ではわかっていてもつい体が動いてしまうようだ。

真琴はリエフを気にしつつも、農作業に戻った。

土から半分ほど顔を出している口口芋を、前後に揺らしながら引き抜いていく。くつついてきた泥を手で払い、すぐ脇に積み上げる。荷車に運ぶのは、ある程度溜まってからだ。

「マコト、ついでにこれも持つて行くよ」

「あ、お願いします」

両腕に口口芋を二つも抱えた^{かっぶく}恰幅のいい女性が、手慣れた様子で真琴が掘り出した口口芋をひょいとはち上げる。一個で限界の真琴とは大違いだ。

「あんたも、ちょっと前までは怪我人だったんだか

らね。あんまりむりするんじゃないよ」

「はい」

優しい言葉に、真琴の頬も緩む。

アルミナには、特殊な能力を持つ者と持たない者がいる。無能力者同士の夫婦からは、減多に能力を持つ子供が産まれないせいで、力を持たない者たちは、荒れ果てた大地へと追^おい遣^やられた。

それが自治区のはじまりなのだそう。

第一から第六まである自治区の中でも、第五自治区は立場の弱い者たちが集まって作られた街だった。そのため余所よりも結束力が強く、弱者に対しても寛容だ。三区で受けた仕打ちを思えば、五区^{ごく}はまさに天国である。

しかし、五区にも欠点はある。他の自治区に比べると、人口がだいぶ少ないのだ。リエフの話によると五区の総人口は二千人ほど。だが、税の納付高は余所と変わらない。

不公平ではあるが、自治区に決定権はなかった。

上から指示された量を黙って納める以外に、選択肢はないのだ。

そのため、第五自治区では子供だって立派な戦力である。子供たちのグループが、家畜の世話をしたる収穫した農作物の運搬を手伝ったりと、毎日のように働いている。

「だから、識^{しき}字率も低いんだよね……」

真琴は手を動かしながら、ぼつりと呟^{つぶや}いた。自治区には学校もなければ、義務教育などという制度もない。住人のほとんどが文字の読み書きができない状態だ。

自治区の住人たちにとって、文字の読み書きができる人間は必要だが、一人いれば充分という認識なのだ。子供たちに時間を割^さいてまで学ばせる利点がないと考えられている。

もつとも、そのお陰で真琴は仕事にありつけたわけだが……。

「やつほー。進み具合はどうー?」

「なんだその訊^きき方は」

能天気な声が畑に響き渡り、続いてそれに対するツツコミが聞こえた。ロコ芋を掘り出していた手を休め、真琴は声のした方に顔を向ける。

声の主であるシグルアとヨグリゼは、歳^{とし}の頃二十歳前後。驚くほどそっくりな顔立ちで、背格好もそれほど変わらない、一つ違いの兄弟だ。

無駄^{むだ}ににこにこ笑ってるのが兄のシグルア。無駄にプリプリ怒ってるのが弟のヨグリゼと、初対面の際にリエフが説明してくれたように、顔がそっくりでも見間違^{みまちが}うことはない。

さらに今は、シグルアがショートヘアなのに対し、ヨグリゼは色^{いろ}褪^あせた金色の髪をスポーツ刈りのように短くしたため、二人の差違^{さち}は歴然としている。遠目からでも簡単に見分けがつくようになったと、住人たちからは好評のようだ。

サイズの合わない小さめのシャツと、継^つぎ接^はぎの多いズボンを穿^はいた二人は、真琴に手を振ったあと、

畑の責任者の元に歩み寄って行つた。

「ナディアからの伝言。収穫が遅れてるようなら、人手を追加しようか？ だってさ」

シグルアの申し出に、顎に灰色の鬚ひげを蓄えた恰幅のいい男性が首を左右に振つた。

「もうほとんど終わりだから、手伝いはいい。ただ、畑の土を掘り起こすのは男手があるとありがたい。やれこつちを耕せだの、耕したら耕したでまだ土が硬いだの、手は動かさねえくせに口ばかり達者な奴が多いからなあ」

そこで女性陣から批難の声があがった。おっかねえ、と肩を竦すくめた男性にシグルアが言い過ぎだろと苦笑する。

「まあ、そういうわけだ。明日、手の空きそうな奴らを集めてくれるか？」

「わかった」

収穫したあとの畑は、満まん遍べんなく耕し、次の種たね蒔まきに向けた準備を行う。土が固まっているため、収穫

時以上の力作業になるらしい。真琴は非力過ぎて、その作業には来なくてもいいと言われていた。

「口口芋の収穫はこれで最後？」

「ああ。前回の襲撃を免まぬれた芋たちだ。少しだけだが、ここの収穫を後回しにしておいてよかったよ」

五区を襲撃した三区の者たちは、嫌がらせに倉庫にあった収穫したばかりの口口芋を傷つけていった。口口芋は長期保存が可能な野菜だが、少しでも傷をつけるとそこからあつという間に傷んでしまうという厄介な特徴を持ち合わせている。

そのため、傷つけられた口口芋を優先して消費しているが、食べ切る前に腐ってしまいそうなものは家畜の餌に回したり、乾燥させて肥料の代わりに畑に撒まいたりするしかなかった。

「せっかくだから、俺とヨグも手伝うよ」

「じゃあ、みんなが掘り出した芋を荷車に積んでくれ」

耳をそばだてていた真琴は、その言葉に内心で拍

手喝采した。芋掘りもたいへんだが、一番たいへんなのは荷車まで口口芋を運ぶことだ。

男手が二人増えたことで作業効率もあがり、驚くほどあつという間に芋掘りは終わってしまった。真琴が畔道に腰を下ろして休んでいると、シグルアとヨグリゼがまったく疲れを見せない足取りでやつて来た。

「お疲れ様。はい、お水」

「ありがとうございます」

シグルアに手渡された革製の水筒で、からからに渴いたのどを潤す。生温い水も、疲れ果てた体には甘露だ。

「リフがふて腐れながら草をむしってたけど、どうしたの？」

「口口芋の積み方が気に入らないみたいで。自分で直そうとしていたから、大人しくしているように言っただけです」

「なるほどね。それで拗ねるあたり、リフもまだま

だ子供だなあ」

わざとらしく声をあげたシグルアに、荷車の傍らに蹲っていた小さな影がわずかに体を震わせる。

「おい。あんまりリフを虐めんなよ。ばつが悪くて顔を合わせられないだけなんだから」

シグルアを咎めつつも、ヨグリゼがしっかりとどめを刺す。その声音には面白がつている節があった。大人げない。真琴はいじめっ子のような二人を尻目に、水筒を持ってリエフに近付く。

「はい、お水。のど渴いたでしょ」

まさか真琴が来るとは思っていなかったのか、リエフの切れ長の瞳が驚きに瞳られた。そして、気まぐれに視線が宙をさ迷う。

「怒ってないよ」

「……そーかよ」

水筒を受け取り、リフはそれを一気に飲み干した。初対面の際はずいぶんと大人びた子だと思ったが、最近ではこうして子供らしい一面も見せてくれるよ

うになった。それだけ気を許してくれているようで、心が温かくなる。

「そういうえば、税物の受け渡しは終わったのかな？」

今日は納税日だ。三区の襲撃で一時はどうなることかとひやひやしたが、寄生軟体獣の死骸しがいのお陰で税は半分で済む。日々の食事を切り詰めなくても乗り切れそうだと、住人たちは安堵あんどの表情を浮かべていた。

「いつも昼頃には終わるはずだ」

「納品書に間違いがないか不安なんだよね」

前任者が残したものを手本に、見様見真似みようみまねで作成した書類は、穴が開くのではないかというほど見直したが、それでも不安はつきまとう。

不備があつたらどうしようと、朝からずっとそわそわし通した。

「しかも、私は同席しない方がいいって言うし」

「若い娘を役人どもの前に出せるか」

吐き捨てるような口調でリエフは告げた。ナディアさんもまったく同じことを言つてたな、と真琴は苦笑する。

納税日になると、年頃の娘は家に閉じ籠こもるか、街から離れた畑で農作業をさせられる。自治区の間を下に見ている役人たちの中には、若い娘を見付けると身勝手な理由をつけてむりやり連れ去つてしまう者もいるそうだ。

「でもさ、書類が無事に通るかどうか心配だよ」

「数に間違いがなけりや、問題はねえよ。だいいち役人どもがそんなに細かく精査するかつての。それよりも、今回はさすがの奴らも度肝を抜かれただろうぜ。なんたつて、寄生軟体獣の死骸があるんだからな」

寄生軟体獣を退治できるのは能力者だけ。それがこの世界の常識である。一応、寄生軟体獣を一匹退治できれば、税額の半分を免除するという決まりになつてはいるが、ナディア曰いわく、未だかつてそれを

実践できた自治区はないだろうとのことだ。

役人たちがなんの疑いもなく、それを税の一部として認めてくれるかどうか。不安でならない。

「ちゃんと口裏合わせはしたんだろ？」

「うん……」

寄生軟体獣を退治したのは真琴だ。リエフを追って来た寄生軟体獣を町外れの小屋に誘き寄せ、製粉したロデ麦を室内に充満させたあと、アルミナに落ちた時に持っていた灰のライターで火をつけ、粉塵爆発を起こした。

しかし、寄生軟体獣を退治することはできたが、問題はそのあとだった。

「粉塵爆発」という現象が理解できないナディアたちへの説明は難しく、条件が重なればそういう現象が起きるのだということ納得してもらうにはかなりの時間が掛かった。

実践してみせれば早かったかもしれないが、使用するロデ麦は高価なもので、おいそれと消費してい

いものではない。また、リュックの奥にあった壊れ掛けていたライターも、奇跡的に一度だけ火が点いたが、そのあとはウンともスンとも言わなくなってしまった。

寄生軟体獣の死骸を税物として出したら、その退治方法も問われるだろう、とナディアは言った。真琴の説明をそのまま繰り返しても、信じてはもらえない。

検討を重ねた結果、寄生軟体獣はナディアの主導の下、シグルアとヨグリゼが小屋に閉じ込め、焼き殺したことにした。小屋には燃えやすい藁や材木が置かれていたため、火の勢いが強かったと補足する。事情を知らない五区の住人たちにも、同様の説明がなされた。

真琴の手柄を横取りすることになってしまうとナディアは心苦しそだったが、手柄が欲しくて行動したわけではない。結果的に五区に貢献できただけだ。

一応、話の筋は通っているし、寄生軟体獣を退治した現場もそのままになっている。それに、実際に死骸があるのだ。役人たちも認めないわけにはいかないだろう。

「じゃあ、どーんと構えてればいいんだよ」

「そうだけどさ」

高校受験の時のドキドキ感を思い出すなあ、と真琴は手のひらをぎゅっと握り締めた。むろん、深刻度はこちらの方が遥かに上だ。それでも結果を待っている時の不安感は、近しいものがある。

合格発表の時は、自分だけでなく、青葉荘のみんなも一緒にそわそわしていたものだ。アルミナに来てから三週間。こんなに長い間、青葉荘を留守にすることはなかった。

——会いたいな。

慌ただしい毎日のせいで郷愁きょうしゅうに駆られることは少ないが、ふとした拍子に青葉荘のことを思い出す時がある。胸を去来するのは、寂しさだ。

「おい」

「ぎゃっ！」

鼻先を指で弾かれ、真琴は悲鳴をあげた。むすつとした顔のリエフが、水筒を片手に立ち上がる。

「休憩は終わりだ。次に行くぞ」

「それ、止めてって言ってるのに！」

油断していると、不意打ちのようにリエフは鼻先を弾いてくる。それは真琴だけに限らず年下の子供たちにも同様で、お陰でどんな腕白小僧もリエフには絶対服従だ。

「俺たちは別の畑に移動だ。シグとヨグはどうせナディアに追い出されたんだろ。もつと畑を手伝って行け」

「俺は追い出されてない。こいつを連れて行って、押しつけられただけだ」

ヨグリゼが不機嫌そうに告げた。シグルアは視線を逸らし、惚けたとぼような表情を浮かべる。それに溜息をついたのはリエフである。

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。